

わたしの実践的自己啓発論3

koberyo1

世界中どこの国をみても激動のなかにある。とても安閑としてはいられない。モノゴトの起こるスピードが実に速い。めまぐるしく色んなことが変化してゆく。一国の宰相ですら一秒の判断の遅れが国益を損ないかねない、そんな時代のはじまりである。われわれも一人の個人として生き、この大動乱時代の前夜を泳いでいかなければならないのだ。

油断していれば、時間だけが矢となり、またたくまに「今」は後景に退き、手の届かない過去になってしまう。いま持っている自分を失い、取り返しのつかない結果を生む。

ただ言えるのは、生涯、本を買い、本をむさぼり読む。漫然と読むのではない。問題意識をアタマにどっしりと据え、危機意識をたずさえ、意識しながら猛然と本に挑みかかるのである。

こうすることによって自分の人生を意識して切り開いてゆくチカラをつけていくことにある。

なんといっても自己啓発する近道は読書から、が一番である。

そして問題意識と、前向きな熱意を習慣づけることである。

読書するという習慣があるヒト、そうでないヒトとの人生は、月とスッポンほどの違いが生じる。

そして人間の「よい習慣」の基礎は、若い頃につくられるのである。

これからの時代、どう生きるべきか？

そのチカラを養うためにも、本を読み、そして読んだだけではダメで、それを実践しうるだけの行動力を身につけなければならない。

人と会い語り、映画をみること。音楽を聴くこと。絵画を鑑賞するなどしてバランス感覚を持つようにつとめること。

そして最後にあげた、この芸術的感覚がないと、どうにも均衡を欠いてしまい、右に左にブレてしまい、美しくない。

とどのつまり、「日本人と日本の歴史」、「日本の武士道」、「日本の技術」、「日本の文化」、「日本人の底力」。これらすべて美意識の賜物であり、日本人の生活に芸術が息づいているのである。

こうした美意識を磨くためにも、やはりマスコミの言論にも左右されず、学校の教育だけではない。読書によって考え抜いた思考や技術を世界にむかってドンドン発信してほしいのである。

以下にこれまで書いたことを、10項目にしてまとめてみた。

- ①読書することは、教養をたかめ、自分の人生に力をつけることである。
- ②読書と実践は、人間社会とどう向き合っゆくか、などを洞察し、社会的人間として生きてゆく上で非常に役にたつ。
- ③読書は、「人生のころざし」をたて（目標）、目標にしたがって世の中に資する生き方、自分をより一層生かす道は何かを考え、設計する助けになる。
- ④読書によって、自分をたいせつにし、家族をたいせつにできる。
- ⑤読書とは、「人間道」を学ぶことである。人間を知りことにより、社会にとって有益な人間になれることだろう。
- ⑥読書は、同時に「文章を書く」ことである。なぜならその文章を書いた最初の読者は自分自身だからである。それに文章を書くことにより、自分がよくわかってくるし、自分の弱点を知ることにもなるのである。
- ⑦読書は、読書それ自体で完結することはない。目前の事例、自分の経験がなければ、生きた読書にはならない。本と経験を照らしあうことで、真の博識を得ることになるのである。
- ⑧読書により、専門的な情報を得ることで、一生の仕事をする力を養うことができる。
- ⑨蔵書をもち、紙の本の魅力にひたることも大切だが、ときに電子書籍にも親しむなど、臨機応変な機動力をもち、情報に対していつも開かれている必要がある。

その10.読書で得たものを身近にいる人に話してみたり、実践で活用してみよう。このようなアウトプットの訓練をすることで、プレゼンテーション力を培うことになるのである。

さらにわたしは、本を読まない人は思考力やプレゼンテーション能力を養うことができない、と考えている。

読書なしの人生は、人間から魅力を欠くし、自分を狭くしてしまう。ひいては狭い人間性は、世の中の発展に貢献しない。自分のため、世間のため、世のために読書をし、実践力、自分の「生活力」を無限に高めてゆくべきなのである。

そこから発した無償の献身的な行動のよってこそ、社会に真に建設的なものを築き、残しうるのである。やがて、その人は、期せずして指導者として人を動かす力をしぜんに身につけ、多くの人の希望の灯台となることだろう。

わたし自身は、ものづくりをすることで多くの人に幸福をもたらした松下幸之助翁の教えを日々、実践している。

では、つぎに読書から学んだ、わたしの実践例を示してみよう。

「plan」

「do」

「see」

プラン、ドウ、シーのこの3つのサイクルをたえずまわす。これがわたしが読書から学んだ究極の「生きる上での秘密」であり、松下翁の著作、「人生心得帖」から学んだことである。

まず「プラン」とはいうまでもなく、計画をたてることである。自分が実践しやすいものから着手するのが秘訣である。

つぎに「ドウ」。これは「行うこと」だが、単純に行動を指すのではない。その行動にお素直さ」がなければならない。素直な心でもって行動するとき、この世は生きるに値する素晴らしい世界となる。

そして、「プラン」と「ドウ」をつづけるのである。そして何らかの障害に遭遇し、「ドウ」をつづけることができなければ、また最初の「プラン」に戻り、計画を練り直す必要がある。

さいごに「シー」によって、行ってきたことへの評価をするのである。その評価を行う上で、以下の10項目が大変、役に立つと思う。

①現状把握

②人間の練磨

③自己向上

④反省と革新

⑤未知に挑戦

⑥親に感謝の念

⑦読書を応用

⑧人間から学ぶ

⑨生活の改善

10・日本の歴史をまなぶ

日々、新たなイキイキしたチカラでもって世の人に良き影響をおよぼすことは、はじめは小さなことであるが、この輪がひろがることで、大きなおおきな価値をうみだすことになる。

そして皆さんが開発したものを日本のため、世界のために役立ててほしい。さらには、その行動力、実践力を後進・次世代の人々に伝達してほしい。

以上に掲げた10項目について説明してみよう。

①現状把握

目標をさだめ、いまの自分と現実を分析し、その落差をどう改善してゆくか、その方向性をかんがえてみる。

②人間の練磨

人間はいまはくすんでみえるかもしれないが、じつは光輝くダイヤモンドの原石なのである。日々、おのれの本質を磨き、自身の魅力を発揮できているかをチェックすること

。

③自己向上

ものを大切にみつかる気持ちは、人に対する気持ちにもあらわれる。そのような謙虚さこそ、自己向上をはかるメーターとなる。

④反省と革新

平穏な日々は、心の持ち方一つでいかようにも変化する。おおいに体験をつみかさね、失敗を恐れないことが大切である。また、失敗をかさねることで新しい局面が生まれる。

⑤未知の世界に挑戦

新しいことをはじめることは、未知の世界に挑戦することにある。試行錯誤をかさね、体当たりをする体験をしなくては何も生まれない。

⑥親に感謝の念

日本の家族制度の崩壊は、大家族から核家族となり、親を大切な風習が生まれたことが悪い要因となっている。親の言うことにみみを傾け、親の手助けをすることが大切だ。

⑦読書を応用（学問の鉄則）

読書（学問）は人間にとって道具である。それを使う自分は学問にとらわれ、振り回されないようにすべきである。読書が「知恵」や「行動」の変化するとき、それが真実の学問となる。読書を現実に応用することが大切。そして自分が充実すればするほど、「こうべを垂れる稲穂かな」の精神にならなければならない。威張らないことである。

⑧人間から学ぶ

自分のチカラを正しく使う。客観的・冷静に人間関係を観察、研究し、自己を改善する。

⑨生活の改善

この世に存在するすべてのものは、自分の生活に役立つものである。そのものを生かすことを常時、心がけ、改善につなげる。

その10。日本の歴史を学ぶ

戦後の復興をなしとげた日本の底力は、日本の教育水準が高かったせいである。これは世界史上の奇跡である。こうした奇跡は、日本の歴史の変革期のどの時代にもあらわれている。歴史から未来への戦略を学ぶことができるのだ。

参考資料：

「松下幸之助の智恵」 永沢永一著 PHP発行

「人生心得帖」 松下幸之助 PHP発行

「追論」

なお、どんな本を選んで読み、勉強するかは、それぞれ百人百様である。ここでは取り上げなかったが、各人それぞれが独自でかんがえ、実行してほしい。また読了した本の書評を書きのこすことは大いにチカラをつけることになる。

書籍の購入は、立派な本がブックオフで一冊百円プラス消費税で入手できる。つねにブックオフに行くことを進言したい。